

# 蓮華温泉スキーツアー

(第2日 蓮華温泉～雪倉岳)

2011年5月3日

メンバー： S. Tさん、T. T (記)

頂上より広大な雪面がなだらかに広がる雪倉岳は、山スキーヤーとして、以前から憧れの山の一つであった。オールマウンテンクラブで山スキーを始めて以来、蓮華温泉には2度訪れていた



が、今回、ようやく雪倉岳まで足を伸ばす機会が訪れた。

前夜は19時半には消灯し、就寝したが、雪倉岳へのツアーをひかえて気持ちが高ぶっていたのか、なかなか寝付けず、起床時間と決めた4時半までに3時間ほどしか眠れなかった。

4時30分、眠っていたS. Tさんを起こし、前夜受け取っていたお弁当のおにぎりを朝食として部屋で食べる。日中の行動に余裕を持たせるため、蓮華温泉の朝食時間(午前6時)よりも早く宿を出ることに決めていた。

5時35分、蓮華温泉を出発。下調べしていたところでは、蓮華温泉から瀬戸川渡渉点に至るには二通りのルートがあり、どちらをとるか決めかねていたが、蓮華温泉にてモデルルートとして掲示されていた兵場ノ平経由のルートはいったん高度を下げた後登っていくことになるので、南側のルートをとることにした。GPSで慎重に現在位置や方向を確認しながら、地図上の夏道にほぼ沿って進む。しかし、後に復路で戻ってきたときにわかったが、積雪時のルートは、地図に出ている夏道よりも少し高いところにあり、そのほうがアップダウンが少なく行けた。

7時頃、瀬戸川渡渉点(標高1400m)に至る。宿を早めに出たためか、先行するパーティーは見あたらない。

7時35分、斜度のある斜面を上がりきって後ろを振り返ると、S. Tさんがその斜面にまだ取り付いていず、もう少し気温が上がって雪が緩むまで待つので先に行ってくださいという。しかし、斜面は凍っているような状態ではなく、自分はシール登高でも危険を感じることはなかったため、板をかついでツボ足で登れば問題ないと思い、斜面上からキックステップの方法を伝えて、登ってきていただくことにした。

S. Tさんを待っている間、単独の登高者に先を越される。彼はかかとのクライミングサポートを上げた状態でクローを効かせて登っていた。ディアミールのビンディングはそれができないので、ビンディングについて尋ねてみると、セブンTMというビンディングだと教えてくれた。用具についてかなり詳しいようで、クライミングサポートを上げてクローが効くのは、そのセブンTMを含め全部で三つだけだとも教えてくれた(他の二つの名前も聞いたが忘れてしまった)。だが、どうも彼はテレマーカーのようだ。

そのテレマーカーが、S. Tさんのためにピッケルを貸しましょうかという。自分はすぐに事

情が飲み込めず、どうしたものかと思っていると、S. Tさんの姿が見えてきたが、どうやらS. Tさんが斜面を一度ほとんど登り切ったところから取り付きまで20～30メートル滑落したらしいことがわかった。幸い、腕を擦りむいた程度で、大事には至らなかったようだが、雪が緩むまで待つと言っていたS. Tさんに安易に無理強いしたことを反省。せめて、自分が下まで戻ってステップを作りながら一緒に登るべきだった。ピッケルについては、これから雪は次第に緩むだろうということと、借りてもS. Tさんがピッケルの使い方がわからないということで、結局お借りしなかった。

8時、登高再開。50分ほどシール登高し、小さなデブリを過ぎたところ（標高1770m）でS. Tさんを待ちながら小休止していると、3人のパーティーに先を越された。

小休止しながら、すぐ先の斜度のある斜面で板を外すかどうか迷っていたが、先行した3人の様子を見てみると、シール登高に苦戦しており、一人は途中で板を外して登り始めたので、自分は最初から板をかつぐことにした。

ツボ足で登り始めると、やがて後ろから他のパーティーが追いついてきた。悔しいが、こういふときは後続者は先行者が作ったステップを利用できるので断然楽である。急斜面の途中から、先行の3人のうち途中からツボ足になった一人が作ったステップを利用できたので自分も楽になり、やがて先行の3人に追いついた。

急斜面を登り切ったところで再び板をはき、登高を続ける。雪倉岳頂上付近への視界が次第に開けてくる。

10時5分、休止（標高2090m）。昨日と異なり、今日は風もほとんどないため、休憩していても体が冷えることはない。S. Tさんを待っていると、後続のパーティーに次々と追い越され、1時間近い大休止となった。

11時、S. Tさん到着。頂上までは、普通に行けば1ピッチ半程度かと思われたが、S. Tさんの状況からすると、プラス1時間は余裕を見る必要があると思われた。天気予報では晴れのち曇りの予報であり、午後はガスが出る可能性があるため、あまりゆっくりしてはいられない。頂上までのルートはだいたい見える位置に来ていたため、13時半には頂上から滑り出し、それまでにS. Tさんが頂上に着かない場合は登ったルートに戻りながら滑って行ってS. Tさんと落ち合うことを互いに確認した。

追い越していった多くのパーティーに追いつこうと意気込んで登高を再開したが、標高のせいなのか、あるいは睡眠不足のためか、斜度はそれほどきついわけでもないのに、少し歩を進める度に足が止まってしまう。

11時50分、ハイマツ帯の傍（標高2390m）にて小休止。頂上までは、標高はそれほどあるようには見えず、あと半ピッチくらいで届きそうに見える。

しかし、歩いてみると、半ピッチでは届かず、1時間かかってしまった。頂上近くまで来たとき、テレマーカー3人ほどが滑り出してきたが、追い越していったパーティーのほとんどは、滑りは真北に伸びる尾根のルートのほうをとったのか、他に滑り降りてくるパーティーはない。





13時、ようやく雪倉岳頂上（標高2610m）到着。S. Tさんが一緒にないのが寂しいが、一人でビールで乾杯。状況によってはS. Tさんを待つ時間を延ばそうかと思っていたが、頂上付近はさすがに風もあったうえ、予報どおり空に雲が広がってきたため、予定していた13時半には滑り出すことにした。滑り出す前に、他の登頂者をお願いして、南方の白馬岳をバックに記念撮影。

13時30分、滑降開始。斜面は快適だが、S. Tさんがいないのと、天気が曇ってきたのが残念。

S. Tさんの姿を探しながら、登りの最後のワンピッチを5分ちょっとで滑り降りるが、S. Tさんが見あたらない。おかしいなと思いながら、最後に小休止したハイマツ帯のところで辺りを見回すと、S. Tさんのほうから声をかけられて気がついた。

S. Tさんによれば、めまいがしてきたのでそこで登頂を断念し、1時間ほど休憩していたとのこと。

かなりお疲れのようだったと思われるが、滑りとなればいよいよS. Tさんの世界である。登りのルートの方北側に、広大で快適そうな斜面が見えていた。登りながら眺めていたとき、S. Tさんが、昔あったテレビのスキナウに出てきそうな斜面ですわね、と言っていた斜面である。そちらの方向にルートを定めながら気持ちよく滑り降りていく。



互いに写真や動画を撮り合い、「スキナウごっこ」をしながら楽しんだ。

標高1620m地点で登りのルートに合流し、瀬戸川渡渉点に戻る（14時30分）。

シールをつけ直し、14時45分、シール歩行開始。しかし、二人ともシールが濡れて粘着力がなくなり、シールが板から外れてしまっており苦労した。疲れもあり、蓮華温泉までの道のりは行きの倍くらいに感じられた。

16時30分、ようやく蓮華温泉到着。最後はバテたが、憧れの雪倉岳を滑り降りた充実感に包まれながら温泉につかった。

